



奥の細道

松尾芭蕉

古典の日

蕪村筆 芭蕉坐像
(東京都・江東区芭蕉記念館蔵)



一 序章

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をばらひて、や、年も暮、春立る霞の空に、白川の関こえむと、そとろがみの物につきてこゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取るの手につかず。も、引の破をつらり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲りて、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞ

雛の家

面八句を庵の柱に懸置。

① 新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集
② 紀行・日記・俳文・連句編(小学館刊)
から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

古典としての「おくのほそ道」

古典を読むことは私たちのものの感じかた、考えかたに新しい回路を切り開いてくれる。私たちが使っている汚れたついた日常の言葉からひき離して、光をおりて粒立った新鮮な言葉の世界にまがえらせてくれる。古典に触れてこそ、私たちの精神は目覚め、自分の眼で歴史と現代を見おし、人間とどこから来てどこに行くのかにあらためて想いを馳せることもできる。

そのような力をもつ古典とは「源氏物語でもシエクスピアの戯曲でも、ゲーテの詩でも斎藤茂吉の短歌でもよい。だがここでは、私たち日本人のもう一つの大切な古典、そしていまや世界の古典、芭蕉の「おくのほそ道」を読み味わってゆこう。

「月日は百代の過客にして」に始まるこの冒頭の一章の、すでになんと切迫して、調子の高い文章であることか。にわかにはベトナムの戦場の弦楽四重奏曲でも聴くような感じだ。「行かふ年も又旅人也」と、李白の詩以来の東洋思想の主題の一つをまず提示する。月日も年も、時の流れそのものを擬人化して主語とし、これを旅と見立てた上で、すぐにその時間という旅のなかにさらに舟をうかべ馬を曳いて旅してゆく旅人としての人間、に主語を転換する。

この転換のすばやさ、断言の強さは、みごとだ。冒頭からアレグロというよりはアレストの語調である。芭蕉の奥羽への旅は元禄二年(一六八九)、満で四十五歳の年の春三月末から秋九月まで。だが「おくのほそ道」を紀行の散文詩として完成したのは、最晩年の元禄七年初夏の頃だ。風狂の旅人としての生涯の詩作と思索の達成をすべて賭け、その重みのすべてを託した文章だったのである。

旅のなかに旅するのが人生、との哲学的な主題を述べた上で、また急に「古人も多く旅に死せるあり」とことばは歴史に転ずる。李白、杜甫、西行、宗祇らの先達に思いを馳せながら、「予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて」と、その貴い風狂の歴史につながる者としての自分を語りはじめ。さあ、私たちの心にも「そとろ神」を招きよせよう。

おくのほそ道



はが・とおる 1931年生まれ。東京大学博士課程修了。東京大教授、国際日本文化研究センター教授、京都造形芸術大学学長などを歴任。専門は近代日本比較文化史。著書に「平賀源内」「絵画の領分」など多数。



れる蜚岩があり、さらに川沿いを30分ほど行くと貴船神社に着きます。(バス利用だと10分ほど)本社、結社、奥の宮と少し離れて3カ所に社があり、結社の奥に和泉式部の歌碑が立っています。貴船神社は鴨川の水源にあり水神を祀ってあると同時に古来より縁結びの効験ありと信仰を集めてきました。和泉式部に貴船明神と思われる男の声で返歌も聞こえてきたと後拾遺集には書かれています。霊験あらたかなもみじの名所を平安朝の歌人になった気分で散策してみませんか。(NPO法人・都草 深沢光佐子)

恋多き女・和泉式部も祈願した貴船神社

余韻も心地よく心豊かに

小学校から大学を通して私は国語という科目が苦手でした。22歳から2年間、米国で過ごした。

古典と私

して初めて日本を意識し、社会に出て言葉の大切さを痛感しました。それでも、英語も含めて言葉の効用のみに関心があ

村田機械会長 村田 純一 さん



でも年を取るにつれて、日本の詩歌、島崎藤村、石川啄木、高村光太郎、室生犀星などにひかれるようになったのは、子供の頃意味が分からな

古典文学・文化を広めようと、「古典の日」と定めた。

いま聞き、かつ口ずさんだ百人一首のリズムや、小中学校での美しい漢字がちりばめられた唱歌が、身体どこかに入っていたのかも知れません。

会社の仕事も徐々に減り、時間が出来たのでじっくりと古典を読んでみようと思ひ、平家物語、徒然草、枕草子を味わいました。去年、源氏物語千年紀委員会の委員長に就任したのを機に源氏

物語も読みました。良い文章、良い音楽、良い絵画に出会うと、その場も楽しいのですが、別れた後の余韻も心地よく、心を豊かにしてくれました。

今年の11月1日、古典の日を機に、誰にも、わが国の美しい自然と歴史に育まれた言葉のリズム、美しい響きを身体にしみこませ、自国文化に誇りを持ってもらえればと願っています。

親しむ

京都の森を守り育てる

豊かな水源を育み、多くの生き物のすみかとなっている「森」は、私たち人間にも安らぎを与えてくれます。古代から今日まで続く、かけがえのない「文化」と言えるでしょう。そして森を育てることは、二酸化炭素(CO2)吸収による地球温暖化防止にもつながります。

面積の75%を森林が占めている京都府。京都銀行では「社団法人 京都モデルフォレスト協会」に参画し、府民ぐるみで「京都の森を元気にしよう」という運動を推進しています。この協会は京都の企業や団体が中心となり平成18年に発足、現在400近い企業や団体・個人が加盟し、人工林の間伐や広葉樹の整備、植樹などの活動が府内に広がっています。身近なところから地道な運動を。京都発の新しい取り組みです。

http://www.kyoto-modelforest.jp/

飾らない銀行
京都銀行
http://www.kyotobank.co.jp/

I Love Kyoto 京都を愛するところ

私たちは地元本店銀行として、「京都」の素晴らしさを再発見し、守り育てていきます。